

# ジョン・アップダイク（五）

## —新婚時代—

岩 元 巖

### (1) メアリー・ペニングトンと小説の中の妻たち

メアリー・ペニングトンが才気溢れた美女であったということはすでに前章で述べたが、実際にどのような女性であったのか、アップダイクは自伝『自意識』の中でも詳しくは語っていない。そこで、彼女をモデルとして彼が小説の中で書き表している女性たちから、僕はここで多少の想像力をこめて、メアリー像を描きだしてみたい。幾つかの短編の中で、アップダイク自身をモデルとしたデイヴィッド・カーンの妻として登場してくるデボラは、まずメアリーをモデルとしたことは間違いない。また、アップダイクが自分たち夫婦の生活を素材として書き連ねた『メイプル夫婦の物語』(*Too Far To Go*, 1979)<sup>(1)</sup>の中に登場するジョウンもメアリーをモデルとしたものと考えてよいだろう。

メアリーの外見については、『自意識』の中でアップダイクが「やがて僕は栗色の髪をした若く美しい女性と結婚したい」<sup>(2)</sup>と述べているし、また「若い頃、僕は魅力的で母のように優しく、芸術的で物静かな女性を妻にしたいと考えていたが、それが現実となって現れた」<sup>(3)</sup>とも書いている。メアリーが栗色の髪をした女性であったかどうかは明らかでないが、芸術的で物静かな女性であったことは確かである。同時に、美しく魅力的でもあったようである。しかし、「母のように優しく」というのは、アップダイクの優しい心遣いからの表現で、たしかに彼よりは二歳年上のメアリーは彼を弟のように当

初は優しく愛していたのであろうが、実際は、彼の母と同様に気性の激しい、かなり支配的な女性でもあった。なぜ、あれほど若くして(まだ大学の三年次をおえたばかりであった)結婚したのかについて、アップダイクはそれを生涯苦しんだ持病の乾癬のためと述べ、「僕の皮膚のことをまったく気にしない美しい女性を見つけたのだから、僕はもうその女を失いたくなかったし、また別のそういう女を見つけようなど考えもしなかった」<sup>(4)</sup> からだ、と記している。この言葉には少し冗談めかした気配があるが、それだけにまた本音というものもちらついていて、母親やペンシルヴァニアの故郷、そして少年期から早く決別をしたかった彼の気持ちを表現してもいる。

彼は母親を強く愛していながら、同時に母親の支配から抜けだしたいという相反する感情を持っていた。メアリーを作品の中から想像してみると、アップダイクの母親と共通する部分がかかなりあることに気づく。二人は共に背が高く、そして美しい女性(アップダイクは母親を思いおこす時、「シリングトンの家の裏庭に立つ背の高い、笑みを顔いっぱいにしたえた女子大生のような女性」<sup>(5)</sup> と記している)である。教養という点でも二人は共に優秀な学校を卒業し、遜色がない。ただ、メアリーの方が知的に洗練された家庭で育ち、より良く現実社会に適応している。後で述べるが、メアリーは結婚後、イップスイッチへ移ってからも、その共同社会に適合し、広くアメリカ社会全般の改革にも熱心な女性だった。これは、シリングトン中学校へ就職したにもかかわらず、一日で逃げ帰り、ずっと家に引きこもっていたアップダイクの母親、リンダとは大違いである。

しかし、アップダイクにとって母に似ながら、また姉のようでもあったメアリーも、優しさの反面に強い個性、激しい気性を秘めていたのである。次のようなエピソードから、彼女の気性を窺い知ることができる。

「父の涙」の中で、主人公のデイヴィッドが恋人のデボラを伴って、両親の許を訪れた際のことが書かれている。その折、デボラが彼の汚れた下着や靴下を自分の物と同じスーツケースに入れていたのを母親に目敏く見つけられてしまう。(当時は未婚の女性がまるで同棲でもしているように男性の洗い物を自分の物と一緒にすることは、ふしだらと考えられた)。声には出さなかったが、母親は激しく憤り、やたら台所の物にあたる。その物音で、デイヴィッドは母の怒りを感じとり、それをデボラに伝えるのだが、デボラはかえって反発し、「お母さんも少しは目をさまし、そんな事に慣れなきゃ」<sup>(6)</sup> と

大声でやり返す。デイヴィッドは二人の気性の激しい女たちの間に立って、ひやひやする、という挿話である。

アップダイクの母親も、当初からメアリーのことを気に入らなかったのではないかと推測できる。それは、同じ短編の中で、父親が死んだ年に、デイヴィッドはデボラと離婚をするが、その折に母親が亡き父の話として次のように語っている。「お父さんはね、おまえがデボラを初めて家に連れてきた時から二人がうまくいくか心配していたんだよ。あの女はおまえには少し女らしさが欠けていると」<sup>7)</sup> この言葉の裏には、アップダイク自身の母親がメアリーに対して抱いていた感情が秘められている。息子を愛しすぎるこの母親の嫁に対する意識は、『走れ、ウサギ』のハリーの母親が彼の妻ジャニスに対しての表明する激しい嫌悪感となって書かれているし、また『農場にて』(Of the Farm, 1965)<sup>8)</sup> の中で言及される主人公ジョウイの最初の妻ジョウンへの母親の追憶の中でも微妙に制えても制えきれない反感として描かれている。

小説の中でデボラやジョウンとして登場してくる女性がアップダイクの妻、メアリーをモデルとしていると考え、メアリーと義母となるリンダは同質のため反発しあうものがあつたのでは、と推測できる。しかも、その二人の醸し出す緊張感の間に立つ主人公の困惑する心情が小説の中の緊張を生みだす。

「嫁と姑」という古典的な対立感情が現代のアメリカの家庭生活の中にも息づいており、それが夫であり息子である男を、そして彼の夫婦生活を動揺させる。いつも変らぬ物語でありながら、アップダイクは率直にかつ繊細に新婚間もない若い夫の困惑を描きだすことができている。

僕はこのメアリーに実際に会ったことがないが、二度目の妻、マーサとは二度あったことがある。最初に会ったのは、二人が再婚して、イップスウィッチの西、およそ15マイルばかりの地にあるジェイムズタウンに住みはじめて一年ほどした頃である。1978年の夏、僕は『結婚しよう』(Marry Me, 1976)を訳し、初校のゲラを持ってアップダイクを訪れた。その時、一時間ほどインタビューをした後に彼女が姿を見せ、挨拶を交わし、僕は二人の写真を撮らせてもらった。マーサは三人の子供を産んでいたとは思えないほど若々しく、ポニーテールの髪に、ジーパン姿であったから、『結婚しよう』の中に登場するサリーという不倫の恋に激しく燃える中年の女性とはひどくかけはなれていた。二度目に会ったのは、それから10数年経た1992年のことであ

る。ウィスコンシン大学ミルウォーキー校へアップダイクを講演に招いた折マーサも夫に同行してこられ、大学の宿舎に二泊していただいた。その折の彼女はすっかり有名作家の夫人らしく、高価なスーツ姿のレイディとなっていて、控え目でアップダイクの傍らに常に寄り添うように立っていた。アップダイクは離婚後もメアリーのことを決して悪くは言っていないが、作品のなかで、マーサをモデルとした女性の方が故郷の友人たちの間で評判がよかったことを書いている。例えば、先ほど引用した文のすぐ後で、彼はこう書いている。

ぼくはいつもデボラの弁護にまわるのだった。離婚を望んだのは僕の方だったくせにだ。だが、昔の同級生たちの集まりなどで、友人たちがわざわざぼくに二度目の奥さんはとてもいいねと言いに来てくれたりして驚いた。たしかに、シルヴィアの方が実にうまくぼくの友人たちの間に溶けこんでいた。デボラでは、人見知りをするからそうはいかなかった。(9)

さりげなく書かれているが、この文には二度目の妻マーサとの対照として、メアリーの面影が鮮明になっている。メアリーはある意味で物事を真剣に受けとめすぎる。自分と同じような知的教育を受けた人たちの間ではかなりうまく溶けあうことができるのに、夫の過去の町や村の人々、いわば田舎にじっとかたまりあって暮らしてきた人々とどう接してよいかわからない女性である。これも、アップダイクの母親と似ている。彼の父親が洩らした言葉「女らしさに欠ける」とは、単に「性的な」意味ではなく、女性が潜在的に持つ社交性や外面を重んじる性格のことを秘めている。そして、それは息子の嫁を評した言葉であると同時に、じつは自分自身の妻への暗黙の批評でさえあったのかもしれない。

## (2) 結婚と留学

メアリーの像を以上で描きえたとは思えないが、アップダイクと彼女の結婚とその生活ぶりを虚構化した作品をさらに読み続けていけば、その像はより明確なものとなっていく筈である。

アップダイクは1953年、三年次の学期をおえた六月にメアリーと結婚している。この事について小説の中で描かれるのは実はかなり後、1979年の「メイプル夫妻出頭す」(“Here Come the Maples”)<sup>(10)</sup>において追憶の形で語られている。そこでは、主人公の「僕」(リチャード)がまだ21歳で、大学三年の学期をおえたばかりなのに二歳年上のジョウンと六月のある霧に覆われた日結婚することになっている。その前日リチャードはウェスト・ヴァージニア州から父母と共に車でコネティカット州まで来、そのモーテルに一泊し、結婚式の朝、まずジョウンのアパートに行き、彼女を伴ってケンブリッジ市役所に出向き、結婚の書類に二人で記入し、その後教会で式を挙げる。

教会の式では、終りにリチャードはぼんやりしていて花嫁へのキスを忘れてしまうし、まだ若すぎて、照れくさくて、友人がケンブリッジの南、一時間ほど走った海浜のコテージに送りとどけてくれたのに、何となく落ちつかず、大変にうぶな青年だったことが描かれている。

これらの事柄は、おそらく実際のアップダイクの身に起こったことに違いない。その後数日たって、前にも伝記的事実として書いた通り、二人は新婚旅行をかねて、列車で、さらにフェリーボートでニュー・ハンプシャー州のウィニペソーキー湖の北端にある島へ渡っている。そこで二人は中・高校生用のサマー・キャンプの介添人として働くのである。これもまた、アップダイク夫妻が実際に行なったことで、この短編の中でフェリーボートの様子がよく描き出されている。

アップダイク夫妻はおよそ三ヶ月この島で働いているが、それを終えると、『自意識』の中で書かれているように、<sup>(11)</sup> メアリーの父親の車で、アップダイクの実家まで送ってもらっている。二人が家に帰りついた時、偶然だが、母方の祖父ジョン・ホイヤーが息を引きとっている。この事は、「祖母の指貫」(“My Grandmother’s Thimble”)<sup>(12)</sup>に小説化されている。ただ、そこでは義父は外科医となっていて、「人の死に慣れている彼は遺体を診るために二階へ上がり、そして微笑を浮かべながら階下へ降りてきて、まだ手首は温かいけれど、脈はもうない」<sup>(13)</sup>と告げる。これも実際に起こったことであろう。すでに述べたように、義父のレスリー・ペニングトンは非常にリベラルな宗教家で、人生をかなり冷静に見ることのできる人だった。この際の事柄について、『自意識』の中でアップダイクは「義父は僕と僕の新妻をヴァーモントからペンシルヴァニアの家まで送り届けてくれたユニテリアン派の牧師」と書き記し、

母が、祖父はその義父と会うのを避けるために死んだ、と言っていると書いている。<sup>(14)</sup> 従ってこれもまた事実を利用したアップダイクの作法を示すものとなっている。この時、1953年の9月であり、祖父のジョン・ホイヤーは90歳で亡くなっている。

アップダイクはその翌年、ハーヴァード大学を優等で卒業し、奨学金を得てオックスフォード大学の大学院に留学し、美学を専攻することになる。この時、メアリーも同行し、オックスフォードで長女のエリザベスを出産している。その出産の時の模様を題材にした小説が「死に瀕した猫」(“A Dying Cat”)<sup>(15)</sup> であるが、それについては次に述べることとする。

### (3) 新婚時代の小説二つ

「死に瀕した猫」は、主人公の「僕」(デイヴィッド)が車にひかれ、道に横たわっている猫を道路わきの生垣の中へと移してやり、その事を生垣の家の当主へ宛てたメモとして記し、猫の身体にそえておくという挿話を中心とした短編である。ごく短いスケッチ風のものだが、それが「僕」の留学先のオックスフォードの町で、しかも新妻の出産を控えているという状況の中でのことであるから、猫への同情心も主人公の微妙な心理の反映とみることができる。彼はその前に、病院に妻を見舞い、完全滅菌をした白衣にマスクをつけさせられて陣痛の最中にある妻に会う。

…白衣をまとしてそこに横たわる妻はまるで卒業式で名前が呼ばれるのを待ちかまえているように思えた。(陣痛がやってくると)彼女は話すのを途中でやめ、遠くから聞こえてくる女校長の声を聞きとろうと、じっと耳をそばたせる。すると、その顔に恍惚とした表情が現われる。痛みが去ると、彼女はほっと溜息を洩らし、「わあ、ちょっとすごかった」と言い、それからまた僕にむかって、食事は一人でどうしてるの、とか、生れたらだれとだれに電報を打つつもりかななどと話を続けた。<sup>(16)</sup>

この描写は、虚構の新妻(デボラ)というより、現実のメアリーの表情と性格をよく書き表していると思えない。異国の地での出産という女性にとって非常に不安であるべき事柄が、彼女には一種の冒険のように受けとめら

れている。その勇敢さは若い夫の心をなごませ、かつ夫の食事のことや、出産後の故国のあちこちへの報せの電報にまで心を配っている。まさに「姉さん女房」であったメアリーの性格をよく描出している。

この後、「僕」はまだ出産までには間があるということで一旦家に帰らされる。夜の町へ出、「僕」は偶然道路の真ん中に横たわる猫を見いだすことになる。車に轢かれたらしいが、まだわずかに動いているので、「僕」はそれを道の端の生垣の内側に移してやる。猫が生垣の家のものと推測したからである。猫の血で汚れた手袋を気にもせず、家へと急ぎ、猫の主人へ事の次第を書いた手紙を用意し、住所と署名まで入れてそれを手に再び現場へと戻る。「僕」はそして家に帰って寝てしまう。明方、「僕」は病院に電話をいれ、無事女兒が生れたということを知る。

アップダイクはこのスケッチ風物語を含めて四つの短編を連作として発表している。(邦訳の題は「四つの物語」新潮社『アップダイク自選短編集』)そこに収められている「踏かためられた大地」、「教会へ通う」、「死に瀕した猫」、「下取りに出した車」には必ずしも一貫性のようなものはないように見える。背景となっている時代も異なるし、主題的な関連もない。ただ、語り手主人公が「僕」ディヴィッド・カーンであるだけである。だが、「死に瀕した猫」の冒頭の一文「物事には輝かしい面と暗い面がある。すべてが上昇し、すべてが沈む」<sup>(17)</sup>が印象的に四つの物語を統合する主題であるかもしれない。

実は、アップダイクの心はこの頃宗教的に困惑していた。彼は思春期にキリスト教の信仰を含め、神への信に疑問を抱くことになるが、大学に入って完全にキリスト教への信仰を捨てている。しかし、神の存在への信を全面的に捨てたわけではなく、メアリーと結婚してから彼女の言うまま、教会(会衆派)にも属している。また、教会という制度こそ信じていなかったが、自然の中に存在する神を信じていた母親の影響であろうが、彼は自然界(野や森や人間を含みそこに生きる生物たち)に神の存在があるのでは、と考えている。だから、一見何ら関連がないように思えるこの連作について彼自身が「宗教的信念が問われている物語だ」<sup>(18)</sup>と述べるわけである。

アップダイクは『走れ、ウサギ』で示したように既成の宗教に対して不信を投げかけながら、神の意識には肯定的となっている。迷える子羊のように主人公のウサギ(ハリー)は新しい救世主にはなれず、世間に背を向けて逃げ去るのだが、ハリーも神そのものを否定してはいない。アップダイクが「物事には輝かしい面と暗い面がある」と書き、人間にとって上昇の時があれば沈む時があると断ずるのは、それが神が人間に与えている「恩寵」である

と考えているからである。人間は自らの上昇と下降の間に立つて惑い、一喜一憂するが、すべてを統合してみれば、必ずバランスが取れているものである。猫は死に、赤児は生れる。四つの物語を精細に読めば、このバランスに気づく。人間には、悲しい出来事があれば、うれしい出来事もある。当り前のことであるが、生があれば死もある。それが神が人間に与えている「恩寵」というものである。アップダイクはそう考えることによって、自らの揺らぐ信仰心に一種の安らぎを与えようとしていたのである。

もう一つの短編は、後に「メイプル夫妻」(the Maples) の物語の第一章となる「グレニッチ・ヴィレッジに雪が降る」(“Snowing in Greenwich Village”)<sup>(19)</sup> である。『メイプル夫妻の物語』は 1979 年に紙装版で発表されているが、作者自身がその序文で記しているように、リチャードとジョウンという「夫妻の姓は楓の木(メイプル)に由来する。それはノールウェイ・メイプルの街路樹でおおわれた小さな町で成長し、後にシュガー・メイプルや秋になると燃えたつような色に変るスウォンプ・メイプルの多いニューイングランドに移り住むことになった若かりし頃の僕が好んでつけた名だ」<sup>(20)</sup> とある。つまり、この連作は虚構の産物でありながら、作者自身とメアリーとの結婚生活を限りなく実際に近い形で素材としたものだった。もちろん、アップダイクは当初から成人してからの自らの生活を素材とする連作を書こうと考えたというわけではなかったようだ。「メイプル夫妻」の物語が正式にまとまった形で現われるのは 1972 年に『美術館と女たち』が出版された時である。この短編集の後半に「ボストンを行進する」(“Marching Through Boston”) ほか四つの短編がまとめて「メイプル夫妻」として収められていた。それら五つの短編は『ニューヨーカー』誌と『ハーバース』誌に 1966 年から 71 年にかけて当初掲載されたものだった。

アップダイクはその後も上掲の二誌をはじめ、『プレイボーイ』誌や『アトランティック・マンスリー』誌などにメイプル夫妻を主人公とした短編を発表し続けた。そして、さらに書きおいてあったものや、連作に仕上げるために書き加えたものなど七編を足して全編 17 の短編からのなる『メイプル夫妻の物語』を 1979 年に発表するに至ったのである。この 17 編のうち、16 編はアップダイク夫妻がボストンの北にある海浜の町、イップスイッチへ転居してからの生活を素材にしているが、第一章に当たる短編だけはニューヨークのグレニッチ・ヴィレッジに住居を構えていた時代のことをもとに構成されている。

アップダイク夫妻は 1955 年の 8 月にイギリスより帰国し、当初マンハッタ



ン地区のリバーサイド・ドライブ 85 番地に住む。アップダイクは『ニューヨーカー』誌のスタッフライター職を得、「町の話題」(“The Talk of the Town”)を担当しながら、詩や短編も同誌に発表しているが、56年にグレニッチ・ヴィレッジのアパートに居を移している。「グレニッチ・ヴィレッジに雪が降る」は夫妻が越してきて間もない頃のある夜のことを素材とした短編である。

それはさらりと「メイプル夫妻は前の日に西 13 丁目に越してきたばかりだった」<sup>(20)</sup> という文章で始まる。夫妻はその夜、近くに住むレベッカというジョウンの旧友をカクテルに招くのである。レベッカはジョウンとは違い、非常に女性的、いつも微笑をたたえ、まるで夢の中にでも住むように見え、現実ばなれした振る舞いをし、リチャードの心をくすぐる。リチャードはジョウンより二歳年下だが、それ以上に若く見えるので、いつものことであれば、主人役はジョウンにまかせ、常連の客のように振る舞うのだが、レベッカを迎えて彼は甲斐がいしく主人役をつとめる。

物語の中で何かが起るわけではなく、ただレベッカが語る変った女友達や男友達の話に夫妻が興ずるだけである。レベッカは生真面目なジョウンと対照的にその生活ぶりも浮遊物のように頼りない。彼女の話から、一見投げやりな生活、まるで無防備にも思える独身の美女という暮しぶりがうかがえる。リチャードはその頼りなさにその夜魅せられてしまう。レベッカの話もつきようという頃、外でカッカッと馬の蹄の音が鳴りひびく。窓をあけ、三人して 13 丁目の街路を二列縦隊で通りすぎる騎馬警官たちの姿を眺め、そして雪が降ってきているのに気づく。雪の多いヴァーモント育ちのジョウンは自分たちの新居に移った夜に雪が降ってきた、と感動し、リチャードを人前かまわず抱きしめる。それから、彼がレベッカを彼女のアパートまで送っていく、という物語である。

レベッカという女性が実在の人物をモデルとしたものは明らかでないが、しかし、アップダイクは彼女を描きだすことによって、ジョウン、つまりは実在のメアリーの一面を示してくれている。例えば、物語の冒頭でリチャードがレベッカの外套を取ってやる場面が書かれるが、彼はそのあまりの軽さに何とも言えぬ「女」を感じている。書かれてはいないが、ジョウンの物とは違う軽さ、日本流に言えば「天女の衣」のような感じを抱き、自分の妻とは異なる何かを感じている。この感覚は小説の主題のようにさらに続く。レベッカはすすめられたソファに座らず、その傍らに床の上に横ずわりに席を占める。その顔色は蒼白く、ふっくらとした眼もとと口もとにリチャードはダヴィンチの描く女を想う。一方、ジョウンはヴァーモントの実家(メアリ

一の実家もヴァーモントで、祖父母はクェーカー教徒) から持ってきた時代物のヒッチコック・チェア (黒塗りの木製、垂直の背に蘭草 (いぐさ) のシートをもつ) にきちんと座り、風邪が直りきらず、鼻水を拭くハンカチを手にしている。彼女の顔も蒼白だが、熱っぽいのか、顔の所々にピンク色が浮かびあがっている。長い首筋と細長い碧い眼、背筋を伸ばし、頭をわずかに問いかけるように傾けている様から、リチャードはモジリアニの描く女に似ている、と考えている。

もちろん、現実のアップダイクの妻、メアリーはそこで描かれるように病的で、弱々しくはなく、後の数々の短編で描かれているように健康的で強靭さを秘めた女性だった、と推測できる。この短編では、レベッカとの対比で弱々しくはありながら、生真面目で、年下のハンサムな若い夫を多少支配している気配を見せる女性として作者は提示しているだけである。むしろ、アップダイクという作者は潜在的に自分たちの結婚生活に存在している微妙な感情をこの何でもなし短編に映しだして見せようとしているのかもしれない。

若い夫は決して不満ではない。夫は妻に支えられ、そしてひそかに操られていることを承知している。だからこそ、彼は自由に妻と違うタイプの女性たちに魅せられ、密かに恋心を抱いてまた妻の許へと、つまり安全な自らの巣へと戻っていく。この形は、後に書かれていくメイプル夫妻の物語の底流として長々と続いている。それがまた、二人の結婚生活を乱し、不倫や最終的な破綻へと導いていく原因となるのであろうが。

前章で書いたように、アップダイクは自分にとっての「完璧な女性」をメアリーに見たはずであったが、人間には「完璧な」ものは存在しえない。彼が若すぎたから、メアリーを「完璧」と考えたわけではない。若い時、人はやがて恋人となり、伴侶となる異性を「完璧」と思わなければ恋もしないし、伴侶として選ぶこともできないであろう。だからこそ結婚生活の微妙な「不完全」さを、アップダイクはこの短編で新婚の夫婦にすでに描いたのである。

#### (4) イップスイッチへ

アップダイクは 1957 年 3 月に『ニュー Yorker』誌を辞し、その年の 1 月に生れた長男デイヴィッドと三歳になろうとする長女エリザベスを伴い、一家をあげてボストンの北北東 50 マイルほどの地にある海濱の町、イップスイッチ (Ipswich) へ引っ越している。彼はその事情についてこう記している。

1957年になぜ僕はニューヨークを離れ、恵まれた職を辞してしまったのか？それは皮膚病（乾癬）のせいだった。陽の当らぬ都会の陰の中でそれはひどくなり、洗面所の鏡の上方にあるソケットに太陽灯のバルブをさしこんでも何の役にも立たなかった。家族共々に、はるばるマサチューセッツ州イップスウィッチまでなぜ僕が引っ越したか？それは、この古めかしい清教徒の町には北西部の素晴らしい海浜の一つがあったからだった。その砂丘に僕は罪にまみれた「古<sup>いにしえ</sup>」の隠者が砂漠におもむくように自らの肉体を陽光で焼き、皮膚病を治してやることができる、と思ったからだった。(21)

この一文を全面的に受けとることはできないが、多少アップダイクの本音であることは間違いない。彼は青春時代から悩んでいたこの皮膚病から生涯のがれることはできなかったが、後年になって、そしてまた実際にイップスウィッチの海浜での日光浴が効果を現わしたのか、あまり気にはしなくなっている。

しかし、もう一つ理由があったのではないだろうか。『ニューヨーカー』誌のスタップライターという職はまだ20代の青年には恵まれすぎているものと思えるのだが、アップダイクはもう少し野心的であったのではなかろうか。気の利いた短編と機智溢れる短い詩、そして都会の様々な話題を書くだけでは彼は満足できなかった。本格的な長編小説を書くこと。職業作家として確立すること。それをアップダイクは目指していたのではないだろうか。そのために、彼はニューヨークを去り、やがて海浜の田舎町で午前中は必ず小説を書くという、いわば背水の陣をしいたのでは、と推察することができる。

たまたま、メアリーの父の友人がイップスウィッチに所有する家を提供してくれて、彼らはそこへ一時的に住むが、翌年の1958年に古い家を購入し、そこに移り住んだ。町のイーストストリート26番地にあった18世紀に建てられたと思える古家だった。彼らのイップスウィッチでの生活の始まりだった。アップダイクは自ら述べるように「この地で僕は人生をしっかりと手につかみとった」(22)のである。メアリーとの結婚生活は「完璧」というわけにはいかなかったが、二人はこの町にうまく溶け込んだ。そして、アップダイクはこの地で、自らが志向していた職業作家として、次々に話題作を提供し、彼にとって最も稔り多き時代をこの地で過ごすこととなった。

[注]

- (1) John Updike, *Too Far to Go : The Maples Stories* (New York : Fawcett Crest, 1979)
- (2) \_\_\_\_\_, *Self-Consciousness* (New York, Alfred A. Knopf, 1989), p. 44.
- (3) *Ibid.*, p. 99.
- (4) *Ibid.*, p. 48.
- (5) *Ibid.*, p. 235.
- (6) John Updike, *My Father's Tears* (New York : Ballantine Books, 2009), p. 204.
- (7) *Ibid.*, p. 206.
- (8) \_\_\_\_\_, *Of the Farm* (New York : Alfred A. Knopf, 1965)
- (9) *My Father's Tears*, p. 207.
- (10) *Too Far to go* の最終章
- (11) *Self-Consciousness*, pp. 174~175.
- (12) \_\_\_\_\_, *Pigeon Feathers* (New York : Alfred A. Knopf, 1962), pp. 174~245.
- (13) *Ibid.*, p. 231.
- (14) *Self-Consciousness*, pp. 174~175.
- (15) *Pigeon Feathers* の中(pp. 253~257) に収録されている。
- (16) *Ibid.*, p. 254.
- (17) *Ibid.*, p. 253.
- (18) \_\_\_\_\_, "Introduction to *Self-Selected Stories*" in *More Matter* (New York : Alfred A. Knopf, 1999), p. 768.
- (19) この短編は最初 *The New Yorker* 誌に発表され、後に *The Same Door* (New York : Alfred A. Knopf, 1959) に収録されたが、後に *Too Far to go* 出版に際し、メイプル夫妻の物語の第一章となった。
- (20) *Too Far to Go*, p. 13.
- (21) *Self-Consciousness*, p. 48.
- (22) *Ibid.*, p. 49.